

末黒野

すくろの

12月号 (通巻856号)



水澄める

澄みわたる秋気あまねし梓川
潺々と大正池や水澄める
せせらぎの音を霧吸ひ河童橋
ウエストーン碑へ飛び石三つ水澄める
霧走り稜線しかと前穂高
空澄むや焼岳の肌荒々と
稲の波分けてひかりを川流し
朝郡上八幡市の高山陣屋秋日燦
宗下呂祇水てふ水湧けりひやひやと
水草の紅葉しモネの池といふ
奥飛騨や流れは白蛇霧は龍
鷺一羽釣り人ひとり秋の水

松本三千夫

燕去る

鳥渡る起伏の多き島の径
見霽かす海を平らに鯨日和
小鳥来る弁財天の在す島
林立のマストをかすめ燕去る
細り行く半島の先秋ともし
数珠玉の艶生まれくる海の風
山葡萄釣場へゆるき坂下る
神鈴の余韻ひろぐる秋思かな
山すでに秋の装ひ水の声
小鳥来や動き始むる山の色
庭師まづ目をもて計り松手入
金木犀香るこの地に永らふる

黒滝志麻子

(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

秋彼岸

田中臥石

病院へ妻に付き添ふ秋桜
治験薬なき妻南瓜煮てゐたり
こぼろぎのこゑや宇宙の闇深め
埴輪館訪ひて夫婦や蕎麦の花
秋の日の埴輪へ一語妻発す
埴輪館出でて小径を鬼やんま
沖に台風高潮どんと堤越ゆ
東京五輪まで妻生きよ葉鶏頭
ふたたびの原爆危俱す曼珠沙華
川風の潮の匂ひや秋彼岸

葛の葉

森清堯

近道のくの字に折れぬ花常山木
隠沼のひかりを掬ひ銀やんま
朝顔や仕事に対ふ気を高め
露草の青の深さや遠き日々
潮風に皺める野もせ花すすき
山峡の空の碧濃し芋の露
塗り立てのやうな白樺秋気澄む
分らぬの言にはじまる秋思かな
葛の葉を裏返しゆき風白し
木瓜の実やつつけんどの子の返事



蒼き闇

森清信子

藻の花や風をとらふる川の面
丁寧に今日を生きたし稲の花
稲光闇の蒼さの際立てり
大岩を滑る流れや黄せきれい
心細さ募る夕べや鹿の声
いななきの溪に吸はれぬ葛の花
爽涼や木洩日躍る柿田川
迷路めく大寺の廊稲光
酒蔵の分厚き扉鱗雲
峡の風のふくらむ薄かな

秋思

安齋久英

すれ違ふ秋暑の小道よそよそし
白木槿流るる雲にまぎれけり
秋夕焼鉄橋渡る一車輛
路地奥へ闇が背を押す秋思かな
秋蟬や瀬音のいよよ昂れる
霧深しシートベルトに身を固め
剣崎の沖に迫り出し秋入日
山門を潜る秋思の身を屈め
海石打つ波の競ひや海霧の沖
露けしや小流に添ふ遊歩道

秋日和

石黒興平

地の神の呼吸孔めく蟬の穴
馬棚の伸ぶ夕焼生まるるところまで
明易し意外と揺るる救急車
荒壁の苫屋や烏瓜の花
時計無き佳人の腕の涼しさよ
音もなく阿夫利嶺かくし秋徼雨
秋霖や靄流れゆく山の畑
さはやかや癌病む漠揺るがざる
錆鮎といへどきらりと釣られけり
朝顔や神鶏突と高き声



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



秋さびし

岡野里子

袖垣の竹のあめ色百日紅
しなやかに草と揺れをり糸とんぼ
糠雨の森の深さや水引草
数珠玉の艶のさみどり小糠雨
産土の杜や蝸夕を鳴き
秋さびし風に動かぬ風見鶏
熱の身に妣近く在し窓の月

和 漢 葉

岡田史女

おくれ毛の吹かれてゆくや秋桜
島径は起伏の多しねこじやらし
雨すぎて薄はひかりまとひけり
鈴虫を籠に鳴かせて休憩所
露草のつゆ瑠璃色をこぼしけり
虫すだく夜や煎じる和漢葉
町川の水嵩増せる野分かな

四条河原

小田嶋野笛

蚊を打ちて蠅を叩いて盆支度
悪女にもなれぬ凡夫や施餓鬼寺
秋の蚊や四条河原に点火待ち
挨拶の愚痴となりたる秋暑かな
主君の名は牛若丸や弁慶草
虫の音を秋田音頭と聞做しぬ
秋来るや老軀に痒き痕残し

葦原 加藤静江

苔清水きらめき森の美術館
葦原の葦の高さや雲流れ
秋草の中より堰のひびきかな
行合の雲や阜の秋桜
秋風や硫氣の谷の黒たまご
山壁を流るる霧や小湧谷
杣道の丸太階段つくつくし

旅なかば 菅野日出子

虫干やまだ捨てられぬ子の産着
四五冊の俳誌机辺に夜の長し
階のもろき塔頭地虫鳴く
生身魂と呼ぼるる齡旅なかば
塔頭の落慶間近けらつつき
放埒に育つ苦瓜借畑
暖色に替はるマネキン残暑光

葛嵐 斉藤マキ子

草競馬ありし原なり葛嵐
盆東風やごろりと乾く潜水具
新涼やビシソワーズに銀の匙
秋鯖のよき酢加減や越の酒
三つ編みのころの自画像青みかん
ゼロ並ぶスコアボードや赤とんぼ
爽やかやボルトになるといふ笑顔

萩の花 堺昌子

御神馬のをりし厩舎や昼ちちろ
塩釜のマリンゲートや鳥渡る
すいつちよや口すぼむるも真似られず
父母の眠る墓域の萩咲けり
秋澄むや政宗公の騎馬の像
恵林寺やいろづき早き花梨の実
築山の松の枝ぶり新松子

青炎集

松本三千夫選



横浜 原 和三

桃すすり父母なき里を近うせり

紺朝顔火花飛び交ふ鉄工所

登り来し古刹に勢ふつくつくし

禅寺に外語飛び交ふ残暑かな

外厨水引植糸し古火鉢

峡の里稲田あかりに明け初むる

横浜 山崎 稔子

子規庵の庭へ一步や秋の草

種採り継ぎ朝顔深き藍を継ぎ

宴果てて洗ふグラスや虫の声

金網の閉す炭窯つくつくし

ざわざわと葉擦れの音や蘆の秋

ひとり帰る子とハイタッチ夏の果

横浜 布施由岐子

叫びたき午後ありけり残る蟬

雑踏に溶くる潮の香秋暑し

稲妻や地球にとどめ刺すごとく

山稜は恨みの雨や弟切草

黄金色の風や乱舞の秋茜

声高に語らふ様の案山子かな

町田 伴 秋草

バスを待つ園児神妙休暇明

汗拭ふタオルに山の気の沁みて

高原の風の軽さや女郎花

息止めて蜻蛉止める指の先

半袖に長袖混じる残暑かな

紅蓮なり逢魔が時の秋の空

横浜 片岡さか江

一句拾ふ楽しみありて草むしり

夏風邪の枕辺に置く句集かな
琴の音の流るる野点虫すたく
谷戸歩き足をとどめて昼の虫
天高し二夜続きの雨のあと
秋風や道行く人の声若き

横浜 佐藤喬風

傘寿の坂ひよいと越えけり秋の蝶
頂を霧すつぽりと裾残し
生盆や二つ返事の縄のれん
大仏の臍に亀虫あらかしこ
子に父の手加減ゆるき草相撲
灯さずに暫しの暮色盆の月

横浜 飯田久美子

西日差す午後四時の庭土いきれ
ただならぬ闇の深海巨大鳥賊
星月夜砂のカンバス風の筆
おさんどん一日返上敬老日
ヘッドホン耳に飛び込む虫の声
朝まだき風存問の葛の花

狭山 沼崎千枝

満足感指さす先の流れ星
漆黒のマウナケアより銀河かな
蕎麦の花遙かに青き八ヶ岳
日を揺らす雲の白さや秋茜
冬瓜汁しとしと雨の降りにけり
鉄骨の駅舎残して帰燕かな

横浜 正谷民夫

頭を振りつ振りつ毛虫の前進す
青海（あおうみ）や水母と泳ぎ子と泳ぎ
先鋒は熊蟬けふも手強いぞ
秋立つや秩父武甲は石の山
眠剤を母に割りやる夜半の秋
秋天より降る高跳びの人とバー

新宿 稲垣佳子

合歓咲けり雲一片も無き空に
小糠雨音なく秋のこぼれけり
合唱に今朝かなかなの加はりぬ
とんぼうの折り返しては水叩き
括られてなほ立つ炎鶏頭花
みんなの声発条のゆるいごと

耕 土 集

黒滝志麻子選

化粧水手にたつぷりと今朝の秋

横浜 渡辺美智子

動きたる闇に彩あり風の盆

猫じゃらし気ままな風に遊ばるる

もの言はず終はる一日や秋刀魚焼く

一人居の居間早々と秋ともし

押し合ひて割り込むベンチ星月夜

横浜 五十嵐富士子

人を吐く自動扉や秋暑し

涼風や路地吹きぬくる笛の音

縁側の小さき軋みや水引草

単線車に運ばれてくる秋の声

灯台の点灯早し磯の秋

横浜 佐藤康子

鳳仙花静まり返る女人堂

明六つや蝸の鳴く城ヶ島

高く高くとんび飛び交ふ秋の浜

釣り舟の漁火淡き月の夜

大漁旗祭の海を渡りけり

横浜 池乗恵美子

阿夫利嶺の空の真青や稲の花

電気柵の巡る山里稲の花

癒えし目に去年とは違ふ星月夜

山門に懐かしき顔盆の寺

熊笹を分けて尾根道茸狩り

横浜 志藤 章

秋麗や船一艘と雲ひとつ

螻蛄鳴くや闇底深く誘ひおて

湿原の鴉猛猛し空の青

郷の夜や囲碁打つ音のさやかなる

街道の石倉カフ工酔芙蓉

横浜 長田 厚子

禅寺の抹茶一服爽やかに

古民家に漂ふ土間の秋気かな

湿原の風の匂ひや釣舟草

かなかなの声のふくらむ切通し

法師蟬

小川 玉泉

(名譽顧問)

長雨や陶の火鉢の目高殖ゆ
みんなの声ながながと桜の木
腸の除かれ売らる初さんま
虫の音に耳を傾け独り酒
法師蟬暮れても声を絞りをり
裏庭の紫苑今年も花ゆたか

雑記帳 5

年の所為にしては申し訳ないが、我ながら忘れっぽくなった。よい句材に出会って、しめた
と思ひ、すぐメモを取らないと忘れるのである。
他人様への迷惑は避けたいもの。